

第22回ワイルド学会要旨

座談会

『オスカー・ワイルド事典』をめぐるって

司会： 佐々木 隆

(武蔵野短期大学専任講師)

日本ワイルド協会が全面協力した『オスカー・ワイルド事典』が10月に無事出版された。会員以外の専門家にも執筆して戴いた結果、世界で初めての「ワイルド事典」が完成した。

まず出版の経緯については山田先生。事典の編集事務局を置き、協会設立から事典の出版までの流れは荒井先生。事典の最終段階である索引の作成については川崎先生。事典の項目については佐藤先生と玉井先生。日本文学関係については石崎先生。そして、実際に事典の編集に専念された北星堂書店の本城さん。パネリストからまず報告があった。パネリスト、あるいはフロアーからは項目として取り上げる必要のあったものがいくつか指摘された。これからの課題である。

海外ではケンブリッジ・ユニヴァーシティ・プレスより *The Companion to Oscar Wilde* が少し遅れて出版された。事典というよりは論文集の形式であるが、ワイルド復活の機運が確かなことを指示するものである。アメリカではカール・ベクソン編の『ワイルド百科事典』が出版されるという情報が荒井先生から紹介された。

文字通り『オスカー・ワイルド事典』は世界最初のものとなった。事典は完成したが、むしろこの事典の項目執筆を担当した若手の研究者（私も含め）にとっては、ワイルド研究の新しい出発点となったと思える。日本におけるワイルド研究史上に残る『オスカー・ワイルド事典』の出版に参加できたことに感謝したい。

第一発言者の軽薄なる話

山田 勝

(日本ワイルド協会会長)

『オスカー・ワイルド事典』ができあがるまでの裏話、ということで、関係した方々が

座談会に参加するものと思っていました。ところが、第一発言者である私にとって思いがけなかったことですが、かなりアカデミックなものに向かっていったのです。これには私は驚きながら、恥ずかしくもなった次第です。私の第一発言は、余りにも通俗的で、軽薄なものであったからです。これなら事前に打ち合わせをしておくべきだったと反省しております。しかし、今さら反省しても仕方がないので、あの時二日酔いのうちに喋ったことを思い出しながら、記録にとどめておくことにいたします。

私の喋ったことは基本的に事典の「編集後記」に準ずるものでした。北星堂の藤平さんから、発刊の許可を頂いてから、荒井先生に連絡をとり、ただちに川崎、井村両先生にも参加していただき、事典の基本方針を打ち出したこと。実は、この話は1994年末のことでした。私の原案は冬休みを利用して、やや具体化できていたのですが、1ヵ月後の1995年1月17日に、あの阪神大震災が起り、原案が吹っ飛ばばかりだけではなく、交通通信網も完全に遮断されたのは、神戸に住む私にとっては大パニックでありました。この時ばかりは、さすがJRと唸ったものですが、東海道新幹線は予想外に早く開通しました。大阪まで何とかすれば、東京に着いたようなものでした。これに同情してくれたのかどうかは存じませんが、役員の方の強力な御賛成をいただき、編集委員会が発足しました。編集会議はこの年の8月末から合宿方式で精力的に展開されました。ワイルド協会会員は全員執筆すること、ワイルドだけではなく、周辺項目を重視すること、執筆者の選定、大項目すべてに写真か図版を入れること、作品解説は主観を避けるため「あらすじ」ととどめること、後世のワイルドと世紀末研究に大いなる貢献をする事典になること、その他が採択され、項目づくりと執筆者選定に時間を割り当てることになりました。

編集委員からさまざまな項目が提案されるのですが、もし執筆者がいなければ、編集委員がすべて担当しなければなりません。私どもはそれを覚悟の上で、広範囲な項目づくりに着手したものでした。朝から開始し、夕方終わるわけですが、その後のビールの味は今でも忘れられません。

すべてが完了し、執筆者に執筆依頼状を発送することになったわけですが、嬉しいことに会員の皆様方、会員外の専門の方々から執筆の快諾がすべて得られました。そして翌年8月から出版作業に入ったわけです。これからは荒井、佐々木両先生、それに北星堂編集部長の本城さんの苦労がさらに大きくなっていきました。事典の正式タイトルやカバーの選定が終わってから半月もたたないうちに『オスカー・ワイルド事典』が発刊されたのです。丁度この時期、イギリスでは映画『オスカー・ワイルド』が上映されたわけですから、感慨深いものがあります。

ここでおことわりしておかねばならないことが一つあります。この仕事は全員で完成したものです。従って、私も当然、日本ワイルド協会編とするつもりでした。ところが意外なことに、荒井先生から「山田勝編・日本ワイルド協会協力」にするとされたのです。

私はそれを極力避けようとしたのですが、荒井先生は絶対それを譲ろうとはされません。私は昔から荒井先生に威圧されどおしなのです。生来強引な人間である私ですが、どういふわけか、荒井先生にだけは意義を申し立てられないのが不思議でしょうがありません。ただし、どうしてそうなるのか尋ねましたところ、先生は「日本ワイルド協会編、とするよりも、そうした方がよく売れるだろう」という、わけのわからない返事でした。私としても、本来協会から資金提供をしなければならないような専門書を無償で引き受けてくれた北星堂さんには大きい義理があるので、とにかく売らねばならないと思っていました。荒井先生の理由説明に反発できなかったわけでありました。というわけで、会員の皆様方、会員価格(6,300円)を一冊でも多く買って下さるようお願い申し上げます。

「座談会」の発表要旨

川崎 淳之助
(聖徳大学教授)

事典というものの価値が、本文の内容いかんによるのは当り前の話である。しかし、個々の項目というものは決して単独に存在するものではない。それは他のいくつかの項目と互に関連し合い絡まり合っているはずのものである。そういった関連や絡まり合いの箇所を明示するのが、事典における索引の効用の第一の意義であろう。それによって一つの項目ないし事項というものは、より広汎でかつより深い記述として読者によって捉えられることになるからである。事典本体にとって、いわば補助的なものでしかない索引というものが、事典において果す機能は、極めて重要なものと言わざるを得ない。

『ワイルド事典』作製に当たって、そんな視点から索引の仕事に当たったのが、北星堂編集長の本城正一氏、それにワイルド協会の荒井良雄氏、佐々木隆氏、そして私の四人である。

索引の原案を作製したのは本城氏である。氏は、本文をことごとく読破され、その中から索引項目となすべき人名や事項をしらみつぶしにピックアップし、膨大な一覧表を作製した。この大仕事だけで、すでに索引編集の仕事の大半は終わったといってもいい。私は本席を借り、感謝の念をもってこのことを報告したい。

残されたのはつめの作業である。抜けている項目はないか、削除すべき項目はないか、あるいは内容的に片手落ちになっている項目はないか等々といった点検作業、さらには不確定な表記統一の作業、さらにまた原稿に脱落していた原語表記の調査等々の作業である。